

特集・ベトナムのガイ人—客家系マイノリティの歴史・宗教・エスニシティ—

越境集団としてのンガイ人

—ベトナム漢族をめぐる一考察—

河 合 洋 尚 *

The Ngai People as a Trans-border Ethnic Group: Reconsidering the Han Ethnic Groups in Vietnam

KAWAI Hironao*

This paper aims to reconsider the ethnic category of the Han in Vietnam, focusing especially on the Ngai people, a Han ethnic group from South China. In 1979, the government of Vietnam officially recognized them as the Dan Toc Ngai, one of the country's 54 ethnic groups. Therefore, the Ngai people were considered to be the aboriginal ethnic group of the Dan Toc Ngai in previous studies. Based on fieldwork, however, I found that the Ngai people are not completely equivalent to the Dan Toc Ngai, because some Ngai people in Vietnam belong to other ethnic groups, such as the Nung, Hoa, or San Diu. In this paper, I explicate the ethnic category of the Ngai people, clarifying their migration patterns, identity politics, and the formation of a global network since the end of the 1970s. In doing so, I emphasize that the Ngai people are identified as a definite trans-border ethnic group, and that the group's ethnic categories and identities may vary according to the socio-political situation. I will then highlight the necessity of understanding the Ngai people in the context of studying the Dan Toc Ngai and other Han people in Vietnam.

1. 問 題 意 識

中国南部の漢族、特に客家の調査・研究を主におこなってきた筆者が、ベトナムに関心を抱き始めたのは今から10年近く前のことである。中国南部の客家には、ベトナムの親戚とつながりをもつ人々、もしくはベトナムから中国に戻ってきた人々がおり、ベトナムにおける漢族や客家について理解を深めたいと思うようになった。だが、当時はベトナムの客家についての研究が断片的にしかなく、漢族という枠組みでの研究も乏しいようであった。そうしたなか、ベトナムでは客家だけがガイ族という少数民族に分類されているという情報を得て、客家を中

* 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology
2017年7月28日受付, 2017年10月31日受理

心とするベトナム漢族の調査に着手し始めた。¹⁾

ベトナム民族をめぐる概説書²⁾によると、ベトナムでは政府公認の少数民族が53あるが、そのうちホア (Hoa) 族、サンジウ (Sán Dìu) 族、ガイ (Ngái) 族が、シナ語 (漢語) 派に属している。具体的に述べると、ホア族は漢族であり、ベトナム各地に100万人近くの人口がおり、その内部には広東、福建、潮州、海南、広西、明郷など複数のサブ集団がある。³⁾ サンジウ族は、中国から移住した漢語系の民族であり、14万人余りの人口を抱え、その大半は、クアンニン省、バクザン省、フート省、タイグエン省などの東北部に住んでいる。また、ガイ族は、中国から移住した漢族の一系統であり、儒教など中国文化の影響を強く受け、具体的には「Ngái Hák Cá」、すなわち客家に属す。その人口数は1,035人とも7,386人ともされ概説書によって一定しないが、クアンニン省、バクザン省、ランソン省、カオバン省など、ベトナム東北部に居住すると描かれている。⁴⁾

これらの3つの民族は、それぞれ異なる自己意識や文化的特徴をもつカテゴリーであるかのように描かれてきた。だが、ベトナムでフィールドワークを進めるにつれ疑問に感じるようになったのは、これらの3つの民族は果たして完全に分けられるのかという問題である。というのも、調査を進めるうちに、ガイ族、ホア族、サンジウ族、さらにはタイ語系であるヌン (Nùng) 族の一部にも、同系統の漢族集団がいるらしいことがわかってきたからである。結論の一部を先んじて述べると、このエスニック集団は、先行研究でガイ族の前身として認識されてきた、「ガイ」や「ガーイ」と呼ばれる人々である。彼らは、中国の広西チワン族自治区 (以下、広西と略称する) より移住した客家系の漢族であることが、これまでの研究で度々指摘されている [古田 1991; 范 1999; 河合・呉 2014a]。だが、この客家系漢族は、必ずしもガ

-
- 1) 筆者は、中国広東省梅県のキー・インフォーマントの母がベトナムと往来していたため、ベトナム客家についての口頭資料を収集していた。ただし、実際にベトナムでフィールドワークを始める契機となったのは、未成道男、大西和彦、チュー・スアン・ザオの各氏による2013年3月の梅県訪問である [河合・呉 2014b: 27-28]。その年の夏から始めたベトナムにおける現地調査は、ベトナムの人類学的研究を専門とする呉雲霞氏 (英・ランカスター大学) と全て共同でおこなっている。本稿で挙げる事例は、呉氏との共同調査の成果であることを断っておく。
 - 2) ベトナム民族をめぐる概説書として、ベトナム語と英語の2言語でベトナムの54の民族を紹介している『The Great Family of Ethnic Group in Viet Nam』(2002年) および『54 Ethnic Minorities in Viet Nam』(2008年) を参照した。
 - 3) 『Vietnamese Studies』第2号では、ホア族の分布が、ホーチミン市、ハノイ市、ハイフォン市、ドンナイ省、ハウザン省、キエンザン省など全域に広がっていることを示唆している。なお、明郷 (ミンフン) とは、明朝の滅亡に伴いベトナムに移住した、早期の中国系移民を指す。彼らは現地のキン族などと混血をし、言語や文化も基本的に現地化しているが、漢文化を部分的に残していると考えられる [中西 2002]。
 - 4) 『The Great Family of Ethnic Group in Viet Nam』は、ガイ族の人口を1,035人としており、主にクアンニン省、バクザン省、ランソン省、カオバン省という東北部の山地に住むと記述している。他方で、『54 Ethnic Minorities in Viet Nam』は、ガイ族の人口が7,386人であり、バクザン、ランソン、カオバン、クアンニンの各省のほか、北部のタイグエン省と南部のホーチミン市にも分布すると記されている。なお、ベトナムの国勢調査に基づく、ガイ族の人口は、1979年に1,318人、1989年に1,151人、1999年に4,841人となっている [伊藤 2008: 267]。

イ族だけに属しているわけではなく、ガイ族という民族カテゴリーを超えたエスニック集団である。したがって、ベトナムの漢族研究を進めるにあたり、ベトナムの既存の民族分類では捉えきることができない越境集団の存在に着目する必要性を、ますます実感するようになったのである。

本稿は、この「ガイ」や「ガーイ」と呼ばれてきた客家系漢族集団を、ンガイ人と呼称する。後述するように、ベトナムの「ガイ」「ガーイ」は、広西でンガイ人と呼ばれる人々と連続性があるからである。そのうえで、中国のンガイ人がいかにベトナムやその他の国家に移住していったかを捉え直していくことで、ンガイ人が単にガイ族の前集団ではなく、ベトナムにおける国定民族分類上、複数の民族にまたがって存在する「隠された」エスニック集団であることを明らかにする。そして、従来のように、ホア族、ガイ族、サンジウ族、ヌン族といった既存の民族カテゴリーからベトナムの漢族を論じるのではなく、それをグローバルな視点から照射し直す視点を提示する。



図 1 ベトナム地図

2. ンガイ人のルーツと移住—中国からベトナムへ

2.1 ンガイ人とガイ族をめぐる先行研究

ンガイ人やそれと関連するガイ族については、断片的な記録や先行研究があるので、それらをまず整理することから始めることにしよう。

管見の限りにおいて、ンガイ人に関連する最初の記録のひとつは、フランスの軍医であったヴァイランの論文である [Vaillant 1920]。この論文には、19 世紀初頭にモンカイ (Móng Cái) をはじめとするベトナム東北部に移住した客家についての記録がある。他方で、20 世紀前半になると、ベトナムの華僑華人についての統計や概況についての記載がなされるが、その主な対象は、ンガイ人ではなく、「五幫」(広東人、福建人、海南人、潮州人、客家) であった [太平洋協会 1940: 448; 華僑志編纂委員会 1958: 51]。たとえば、1939 年に日本で出版された『佛領印度支那に於ける華僑』では、ベトナム南部には「五幫」がおり、そのうち客家の人口は 2 万人であるとしている。だが、同書では、北部の華僑華人の主流は広東人、湖北人、雲南人であると指摘しており、当時ベトナム北部に多く居住していたはずのンガイ人には触れていない [満鉄東亜経済調査局 1939: 57]。

ンガイ人やガイ族についておそらく最初に系統的な記述をしたのは、1979 年にベトナムで刊行された「ベトナムのホア族、ガイ族と中国覇権主義の陰謀」という論文である。1979 年は、ガイ族がベトナムの少数民族として公的に認定された年でもある。この論文は、ガイ族の「中国人」としての政治的位置を、民族認定される前から歴史的に描き出すことを主眼に置いている [Viet *et al.* 1979].⁵⁾

ガイ族の歴史的、政治的状況に関するより踏み込んだ研究として、古田元夫の『ベトナム人共産主義者の民族政策史』を避けて通ることはできない。この本では、ンガイ人(古田は「ガイ」と呼称している)がガイ族へと移行していく歴史について数ページを割いて説明されている。古田によれば、ンガイ人は広西、特に防城港にルーツをもち、その後、陸路でベトナム東北部に移住した。第一次インドシナ戦争期(1946～54 年)には、東北部を中心に約 10 万人のンガイ人がいたのだという。ンガイ人がベトナムに移住した時期はかなり古く、フランス統治時にはヌンとして扱われてきた。だが、1948 年に中国共産党が介入すると、ンガイ人は中国との友好関係の架け橋となることが期待され、華僑(1973 年にはホア族に分類される)として扱われることとなった。そして、1979 年にベトナム政府がンガイ人をひとつの少数民族として認定した結果、ガイ族が誕生したのだという [古田 1991: 429-435, 585-586, 1995: 187-188]。

5) 同論文では、ンガイ人やガイ族のルーツや社会的、文化的状況については記載が少ない。部分的に、ンガイ人がベトナムに移住したのは黎朝の創始者である黎桓の時代(980～1005 年在任)であると指摘しているが、その根拠は不明である。

古田と同様、中国の著名なベトナム研究者である范宏貴もンガイ人のルーツは広西南部であるとし、特にクアンニン省などベトナム東北部に多く居住すると主張している [范 1999: 219-220]。さらに、范は、ベトナムの客家であるガイ族の社会的、文化的な特徴についても紹介している [范 2004]。これらの研究を基盤とし、筆者は 2013 年より主にベトナム南部と中国南部で複数名のンガイ人（ガイ族だけでなく「ガイ」を自称するヌン族やホア族を含む人々）と面談し、彼らの家族史を通して移住やルーツなどを抽出する調査を実施した [河合・呉 2014a, 2014b]。具体的には、高齢者を中心として被調査者の両親、祖父母、曾祖父母がいかに中国ーベトナム間を移動してきたかについての口頭資料を 30 名以上から収集した。その結果明らかになったのは、ンガイ人の全員が広西南部の旧欽州府、廉州府の管轄内（以下、旧欽廉地区と呼ぶ）にルーツをもつということであった。なかでも、防城港の出身者は約 80% を占めており、そのうち特に那良鎮と那梭鎮をルーツとする人々が最も多かった。結果的に、我々の調査は、ンガイ人のルーツが主に広西南部にあり、陸路でクアンニン省などベトナム東北部に移住したとする、古田や范の主張を再確認するものとなった。そのうえで、我々は、1970 年代末の華人排斥運動の影響を受けてンガイ人がベトナム東北部を離れ、中国、オーストラリア、北米などに移住していることを明らかにすることができた。

以上の先行研究で示されているように、ベトナムでは、同じ客家といっても異なる 2 つの系統がある。つまり、主に南部に「五幫」に属す客家がいるのに対し、東北部を中心にンガイ人がいる。⁶⁾ 前者は主に広東省東部・中部にルーツがあり、ホーチミン市のチョロン地区にベトナム崇正会という客家の総本山となる団体を設立している [河合・呉 2014a; Kawai and Wu 2017]。他方で、ンガイ人は、広西にルーツがあり、後述するように、「五幫」に属す広東系の客家とは異なる集団であると認識されている。

一方、先行研究では、ンガイ人をガイ族の前集団として、連続的に捉える傾向があった。すなわち、中国の旧欽廉地区からベトナム東北部に移住した客家系のンガイ人が、1979 年にガイ族として民族認定されたことを前提にしてきたといえる。もちろん古田が指摘するように、ベトナム東北部に住んでいた一部のンガイ人は実際にガイ族となっているから、その認識そのものは誤りとはいえない。ただし、下記で論証していくように、民族戸籍のうえではホア族やヌン族となっているンガイ人もいるため、ンガイ人＝ガイ族という図式は成り立たない。むしろンガイ人を複数の民族にまたがるエスニック集団として捉えていく作業が、次なる課題として必要となってくる。そのためにも、まずはンガイ人のルーツである広西の客家を検討し直さ

6) 筆者はかつてベトナムの客家について、ホア客家とンガイ客家の類型を提示したことがある [河合・呉 2014a]。両者の区別は、民族戸籍ではなくアイデンティティを基準としていたが、その基準を明確に記載しなかったため、ンガイ客家（ンガイ人）＝ガイ族という誤解を与える表現となってしまったことは否めない。その反省から、本稿では、前者を「五幫」の客家、後者をンガイ人と記述している。



写真1 ンガイ人の故郷・防城港的那良鎮（2014年4月，筆者撮影）

ねばならない。

2.2 広西の客家とンガイ人

繰り返すと、ガイ族やンガイ人は、客家の一系統である。一般的な歴史観に基づくと、客家は北方の中原に起源する漢族の末裔であり、唐末以降の戦乱を避けるため、中国東南部に移住した。なかでも江西省、福建省、広東省の境界地帯（以下、交界区と呼ぶ）は客家の主要な居住地であり、客家は主に清朝期以降、交界区から中国南部各地や世界各地に移住した。そのうち、一部の客家は交界区から広西の各地に移住した。

広西の客家人口については諸説があるが、公的な見解によれば、広西には約900万人の客家が全域に分布している [鐘 2011: 91]。この人口数は、広西の総人口の10%強に相当しており、中国のなかでは江西省、広東省に次いで多い。広西を全体的にみわたすと、客家が多く分布するのは東部と南部であり、相対的に少ないのは西部と北部である。特に客家人口が集中しているのは東南部の玉林であり、その管轄下にある博白県は広西で最も客家人口が多い地区、陸川県は広西で最も客家の占める人口比率が高い（69%）地区となっている。また、防城港の市区と東興は客家の占める割合が約50%である。⁷⁾

ところが、同じ客家といっても、実際のところ言語、慣習、アイデンティティなどの面で様ではない。とりわけ1978年12月に中国で改革開放政策が実施されるまで、広西で客家とみなされている人々のほとんどは、自身が客家であることを知らなかった [河合 2012:

7) その他、東北部に位置する賀州の八歩区は客家人口が約41%を占めている。その反面、西北部の河池や百色ではほとんどの県で客家人口が3%を下回っている [河合 2012]。



図 2 広西地図

37]. そもそも広西で誰が客家とみなされるかについての基準は様ではない。「客観的」な基準からすると、祖先が交界区にルーツをもち、客家語の系統と「科学的に」認定されうる言語を話す人々が、客家とみなされる。だが、広西の客家のなかには、祖先のルーツが交界区でなく、祖先代々客家語ではない言語を話してきた人々も、客家と主張することがある。逆に、祖先が交界区から広西に移住しているにもかかわらず、六甲人やトン族のように非客家を名乗る事例も少なくない [金 2012: 196; 塚田 2017]。若干の先行研究および筆者の調査に基づくと、客家としての自己意識を抱く人々は、もともと異なる複数の集団にルーツがある。⁸⁾ そのうち代表的な 4 つの集団を挙げると、以下のとおりである。

(A) 麻介人：麻界人ともいう。「麻介」または「麻界」は、客家語の「mag ge=何」を意味する。とりわけ三江、龍勝、河池など北部に分布している [金 2012]。

(B) 新民：字義どおりにいうと「新たに来た人々」である。南寧の馬山県、賓陽県、横県などの客家が自称として使ってきた。

(C) 客民：「客人」とも呼ばれる。今でこそ客家であるとみなされているが、ルーツや言語の面でもともと広東系や少数民族であったと思われる人々も含まれている。

(D) ンガイ人：漢字では「艾人」と書く。主に防城港から合浦、博白、陸川、そして広東省西部の廉州にかけての、いわゆる旧欽廉地区に分布している。

以上から明らかであるように、ンガイ人とは、客家のサブ集団のひとつを指す。その分布範囲は、ベトナムのンガイ人のルーツとほぼ一致していることがわかるであろう。⁹⁾ そのなかで、

8) ここに挙げた 4 つの集団は、現在、自らが客家であると名乗っているだけでなく、学術的にも客家であると描かれることがある [鐘 2011: 53-56]。そもそも広西の客家意識は学者により喚起されている側面もあるため、両者は切り離して考えることができない。

防城港や東興の出身者がベトナムに多いのは、単に地理的に近接しているからであると推測できる。先行研究は、ガイ族の前集団であるンガイ人と中国のンガイ人との関係性について指摘することなく、それぞれ別の研究対象として考えてきた。だが、両者は、中国とベトナムという政治空間を越境して居住する、ひとつのエスニック集団として捉え直されねばならないのである。

2.3 ンガイ人の移住および組織化の過程

先行研究の記載によると、ンガイ人は遅くとも 1887 年のフランス統治以前よりベトナムに移住している [Vaillant 1920; 古田 1991: 428; 范 1999; Dang *et al.* 2000: 237]。ンガイ人の家族史を聞いていても、1887 年より前にベトナム東北部に移住し、ヌン、キンまたは他の漢族集団と混住していた例が大半であった。だが他方で、フランス統治期（1887～1945 年）に旧欽廉地区からベトナムに移住したンガイ人もいた。特筆に値するのは、1940 年代にベトナムへ流れてきたンガイ人が一定数いたことである。

1940 年代にンガイ人がベトナムに移住したのは理由がある。旧欽廉地区は 1951 年まで広東省に属しており、その後、数度の行政区編成を経て正式に広西に属したのが 1965 年である。とりわけ民国期には、旧欽廉地区出身のンガイ人が広東省の政府・軍隊で重要な役職に就くことがあった。1930 年代から 40 年代前半にかけて広東省の実質的な最高司令者であった陳済棠は、その代表格である。陳済棠は、防城港出身の国民党の将軍であったため、当時の国民党軍にはンガイ人もしくは広東省の客家が数多く加入していた。周知のとおり、国共内戦に敗れると蒋介石率いる国民党軍は台湾に逃れた。だが、国民党に属していたンガイ人のなかには、抗日戦争時よりベトナムに行ったり、国共内戦後にベトナムに残ったりする人々もいた。¹⁰⁾ また 1946 年には、中国国民党軍と共闘したンガイ人の将軍・黄亞生（ヴォン・アー・サン）が、ヌン自治地域（the Nung ethnic and autonomous territory）のリーダーとなっていた。

黄亞生は、防城港にルーツをもつベトナム出身のンガイ人である。1940 年 9 月に日本軍がベトナムに侵入した時、ベトナム駐在のフランス軍は中国に進軍したがこれに抗することができず、ベトナムと国境を接する東興まで撤退した。その時、黄亞生は、中国国民党軍の張發奎（広東省始興出身の客家）将軍に連絡をとり、中国側の援軍を得てフランス軍を救った。1947 年 7 月 4 日、フランス植民地政府はハイニン省（今のクアンニン省）にヌン自治地域を設置したが、戦中の功績が認められ、黄亞生がそのリーダーに就任した [Tran 2013: 32]。ヌン自

9) 旧欽廉地区のうちのンガイ人の主要なルーツとなっているのは防城港であるが、筆者の調査に基づくと、博白、陸川、および広東省西部の雷州半島にもンガイ人が分布している。ただし、彼らのなかには、ンガイ人（艾人）とは明確に述べず、自らを「講艾的」（艾語を話す人々）などと表すこともある。

10) 2013 年 8 月および 2014 年 1 月に、広東省広州市に位置する花都華僑農場の元華僑弁事所役員（1940 年代モンカイ生まれ、広府人）、花都華僑農場の高齢者（1920 年代ハノイ生まれ、広府人）、ンガイ人である E 氏（本文参照）など、複数のベトナム帰国華僑より聞いた話に基づく。

治地域は、実質的にンガイ人が集中して居住する地区となっていた。

当時、ハイニン省に住んでいた高齢者によると、同省の約 80%が漢族系住民（ンガイ人と広府人）であり、なかでもクアンイエン（広安）県は、ほぼ全員がンガイ人を自称する客家系漢族で占められていた。¹¹⁾ この時、ヌン自治地域のンガイ人は、ヌンとも名乗っていたのだという。また、芹澤 [2009, 2013] は、彼らを「ヌン族の華人」と呼んでおり、そのルーツが旧欽廉地区にあると論じている。したがって、以上から判断すると、ヌン族の一部に属す漢族（ヌンの華人）と本稿でいうンガイ人は、完全に一致するとまでは断言できないかもしれないが、少なからず重複していると考えられる。¹²⁾

しかしながら、1954 年にベトナムの国土が北緯 17 度線で南北に分断されると、ヌン自治地域が解体し、この自治区を担っていたンガイ人（≡ヌンの華人）はベトナム南部へ移住した。このような南部への移住を、現地の華人は中国語で「南遷」と呼ぶ。伊藤正子によると、南下したヌンは約 7 万 5,000 人にものぼり、その多くは現在、華人を名乗っている [伊藤 2009: 133]。ベトナム南部と中国のンガイ人の話に基づくと、この時、黄亞生は国民党を支持する相当数のンガイ人を率いて、南部に移住した。具体的に、彼らは、まず南部のフーコック（富



写真 2 ホーチミン市の護国観音廟
廟の右側の建物は欽廉同郷会（2013 年 12 月、筆者撮影）

11) 2012 年から 2015 年にかけて、ベトナムと中国の双方で実施したインタビュー調査による。なお、聞き取り調査によると、防城港のンガイ人には陳姓と何姓が多かったという。

12) 芹澤によると、ヌン族はタイ・タイ語系グループに分類されるが、「ヌン」はかつての「トー」（タイ族）よりも中国に帰属意識をもつ傾向が強かったのだという [芹澤 2013: 27]。

国) 島に行き、サイゴンに移住した。1954年に国民党支持のンガイ人が「南遷」したのは、北ベトナムが共産主義体制をとったためである。彼らは、反共産主義を掲げる南部に移住し、台湾の支援を受けて現在のホーチミン市第6郡に「自由村」を建設して居住した。また、1972年にはホーチミン市の郊外に護国観音廟(写真2)が建設された[芹澤 2009: 2]。芹澤[2013: 33]によると、この廟は、ヌン自治地域の本拠地であったハイニン省で、1820年に靈山寺として客家¹³⁾により建てられ、1896年に護国観音廟と命名されたのが始まりである。それゆえ、護国観音廟は、ベトナム南部でンガイ人の信仰を集める精神的支柱となったのである。

他方で、ベトナム東北部に残ったンガイ人は、引き続き山岳地帯を中心に生活を営んでいた。当時のクアンニン省の山岳地帯には相当数のンガイ人がおり、基本的には風俗・習慣のうえで他の漢族と大差なかったのだという。¹⁴⁾ だが、1970年代末に中越関係が悪化して華人排斥の動きが高まると、クアンニン省の大半のンガイ人は、中国をはじめとする諸外国へと再移住した。¹⁵⁾ 後述するように、北部のンガイ人は特に中国へ移住している。一方で、本特集の伊藤正子論文によると、ベトナム北部のバクザン省やタイグエン省には「ガイ」を自称する人々が、ホア族の身分で居住しているのだという。果たして彼らが旧欽廉地区にルーツをもつンガイ人であるか否かはまだ確認されていないが、現在のベトナム北部では、ンガイ人はほとんどいないという通説とは異なり、一定数のンガイ人がホア族などの身分で暮らしているようである。次節で言及する家族Aのように、ベトナム人(キン族)女性と結婚した一部のンガイ人男性が、ンガイ人という身分を前面に出さずベトナム北部で暮らしている事例もみられる。この点については今後さらなる調査が必要になるが、中国やオーストラリアで相当数のンガイ人がいる現実を鑑みると、1970年代末にはベトナム北部から相当数のンガイ人が中国など国外へ移住したことは確かなようである。

1970年代末の華人排斥運動は、北部だけでなく南部にも多大な影響を与えた。1970年代末、大半の中国系住民はベトナムを離れ、中国に戻るか、オーストラリアや北米などに移住していった。五島[2011: 3]によると、ベトナム北部では30万人近く、ベトナム南部では120万近くの華僑華人がいたが、1978年に中越関係が悪化してからは人口数が激減したのだという。そのなかにはンガイ人も含まれており、大規模な移住に伴って「自由村」が解体するな

13) 芹澤が入手した文献では、この建設者は潘方容という名で、客家であることが書かれている[2013: 33]。当時のベトナム東北部にいた客家系漢族の主流がンガイ人であるため、潘方容もンガイ人なのではないかと推測されるが、その旨は文献に明記されていないので定かではない。

14) 当時、ベトナムの東北部におけるンガイ人の生活については、ハイフォンの華人による聞き取り調査に基づき別稿[河合・呉 2014b]でまとめている。

15) 少なくとも我々がハイフォンや中国で華人に話を聞いた限りでは、ベトナム北部にはほとんどンガイ人がいなくなっており、モンカイやラオカイに一部残っているにすぎないという回答が大抵の場合かえってきた[河合・呉 2014a: 96]。ただし、我々はまだクアンニン省とハノイでしかフィールドワークをおこなっておらず、バクザン省やタイグエン省など他の北部の省は直接訪れていない。

ど、ンガイ人のコミュニティが弱体化した。その結果、ベトナムに残ったンガイ人は、ホーチミン市やドンナイ省などに点在して暮らすようになった。筆者はベトナムの華人社会で調査するなかで、「護国観音廟があるところにンガイ人がいる」という話を数名から聞いたことがある。ベトナム南部に住む少数のンガイ人は、護国観音廟を精神的支柱とし、国外に移住した親族や友人とつながりを保ちながら暮らしている。そのうえで、2010 年にはホーチミン市の護国観音廟境内に旧欽廉地区をルーツとする華人が集まる団体として、欽廉同郷会が設置された(写真 2)。欽廉同郷会にはンガイ人と広府人が属しているが、ンガイ人の影響力が強いため、準客家団体としてベトナム客家団体の一組織に位置づけられている。しかし、現時点では、欽廉同郷会のような多数のンガイ人が属す華人団体が、ベトナム北部には存在するという情報を得るに至っていない。

3. ンガイ人のエスニック・バウンダリー——ベトナムから世界へ

3.1 ベトナムのンガイ人とそのアイデンティティ・ポリティクス

これまでンガイ人の移住史と輪郭を論じたので、次に民族所属とその名乗りの問題について考察する。具体的には、漢族の一系統であるンガイ人としての自己意識に立脚しながらも、状況に応じて複数の民族／エスニック所属を選択し主張してきた状況をアイデンティティ・ポリティクスと定義し、グローバルな視点から論じる。まずはベトナム国内のンガイ人についてみていくとしよう。

現在、ベトナムのンガイ人に関する先行研究は限られており、その全体的な分布を調べる作業は進行中である。ただし、調査より、ンガイ人は、南部のホーチミン市およびドンナイ省のビエンホア(邊和)、ロンカン(隆慶)、ディンクアン(定館)、フォックハイ(福海)、タンフー(新富)などに集住していることが明らかとなっている。¹⁶⁾ 彼らは、主に 1954 年の「南遷」以降に移住しており、なかには「自由村」の解体に伴ってドンナイ省に移住した人々もいた。ドンナイ省のンガイ人もまた、護国観音廟をエスニック・シンボルとして祀っている。

だが、ここで強調しておきたいのは、彼らはンガイ人を名乗ってはいるが、戸籍上の民族所属は一律でないことである。ンガイ人と自称する人々の身分証をみると、ガイ族、ヌン族、ホア族、さらにはベトナムの 54 の公認民族にはない漢族などと記されていた。この事実は、ンガイ人＝ガイ族として調査を始めた筆者の想定とは反するものであった。繰り返すと、ガイ族とは 1979 年にベトナム政府により新たに認定された民族カテゴリーである。それに対して、広西の旧欽廉地区にルーツをもつンガイ人は、これまでヌン自治地域でヌンとみなされたり、

16) ンガイ人(ヌンの華人)のロンカン、ディンクアン、タンフーへの移住の背景については、芹澤の研究[2013: 31]に詳しい。さらに、芹澤[2013: 31-33]は、ビントゥアン省のソンマオにおける観音廟についても考察している。

その後は華人（ホア族）と扱われたりするなど、民族所属のうえで複雑な歴史を歩んできた。だから、1979年にガイ族という新たな民族カテゴリーが登場した時、ベトナムに住む全てのンガイ人が一挙にガイ族へと民族所属を変更したわけではなかった。一例を挙げると、ホーチミンの護国観音廟で調査した時、ここを管理するンガイ人の民族所属はみなヌン族であった。彼らは、自身が漢族系のンガイ人であると述べたうえで、ヌンでもあると主張していた〔河合・呉 2014a: 97〕。このことについてA氏（80歳代）とB氏（70歳代）は次のように述べる。

「私たちはかつてヌンとも名乗ってきましたが…（中略）…実際には漢族としての意識をもっていました。ヌンは漢字で『儂』と書きます。『農』と広東語の発音は同じです。私たちは確かに農業に従事する人間であったわけですから、農＝儂族というのはあながち間違いではありません。」（2013年12月27日、ホーチミン市の護国観音廟におけるインタビューより）

彼らの根本には、広西（かつては広東省）より移住した漢族系のンガイ人であるという自意識がある。しかし、自身がヌンであることも否定していない。つまり、彼らのアイデンティティはひとつではなく、ンガイ人、広西人、広東人、ヌンと複数ある。さらに、彼らは自身が客家であるとも名乗っている。そして、状況に応じて、それらの身分を使い分けるのである。

まず、護国観音廟を中心に結束するンガイ人にインタビューすると、彼らは、どの民族に所属していても、漢族系のンガイ人であることを主張する。そのうえで、「五幫」系の漢族と異



写真3 ビエンホアの華人墓地（2013年12月、筆者撮影）

なる点として、広西にルーツをもつことを挙げる。つまり、ンガイ人は、自身を広西人の一部として位置づけているのである。他方で、ンガイ人がヌンを名乗っている理由のひとつは、「中国人」としての身分を表立って主張しないことにある。特にヌン自治地域のあったクアンニン省からベトナム南部に移住したンガイ人は、かつてヌン族の一部として政治的に位置づけられていた。つまり、彼らはヌンの華人として人生を歩んでいた歴史があるため、ヌン族＝農族とする解釈のもと、そのままヌンを名乗ってきたと考えられる。

前述のように、ンガイ人は客家の一種であるが、彼らが客家としてのアイデンティティを日常的に強調することはほとんどない。むしろ、彼らは、ンガイ人が正統な客家ではなく、客家の亜種であると認識している。というのも、ンガイ人にはもともと客家としての自己認識がなかったからである。そうした状況にもかかわらず、ンガイ人が時として客家を名乗り、多くのンガイ人が所属する欽廉同郷会が客家団体の一部として位置づけられている背景には、華人社会における力関係がある。ベトナムの華人社会において広西人は少数者である。それゆえ、たとえば墓に入る時、困難に直面する。ベトナム南部ではビエンホアに大規模な華人墓地があり、そこでは漢族のサブ集団ごとに墓が管理されている。ところが、この華人墓地には、ンガイ人はもちろんのこと、広西人の埋葬スペースすらない。だから、彼らは、客家としての身分を利用し、ベトナム崇正会を通して華人墓地に入ることがある。また、筆者がインタビューをした数名のンガイ人は、民族戸籍上の身分がホア族であった。彼らは、旧欽廉地区がかつて広東省に属していたことから、広東人であるとも主張しており、その身分を利用して親族が広府系の墓に入っているのだという。

このように、ンガイ人は複数のアイデンティティを状況に応じて使い分ける、したたかさをもっている。換言すれば、ンガイ人は、時と場合によって広西人、広東人、ヌンの華人、客家などと異なる姿をみせる、玉虫色の性質をもっている。

ベトナムに移住してすでに長い年月が経つ彼らが、ンガイ人としてのアイデンティティを保持している要因として、ベトナムに住む他の漢族集団、特に「五幫」に属す広東省出身の客家との関係性もあると筆者は考えている。先に触れたようにンガイ人にはもともと客家としての自己意識がなかったが、このことは広西南部で調査をしていると何ら不思議ではない。1978年12月に改革開放政策が始まるまで、広西南部のンガイ人もまた自らが客家であることを知らなかったからである。改革開放政策以降、政府が客家文化政策を推進した玉林や北海では、確かにンガイ人が客家であるとする観念が徐々に民間に浸透していった。だが、ンガイ人の主要なルーツである那良鎮のンガイ人のなかには、2014年4月にフィールドワークをおこなった時点でも、まだ自らを客家であると意識していない人々がいるくらいであった。こうした状況であるから、20世紀前半以前にベトナムに移住したンガイ人が、客家としての自己意識を歴史的にもってこなかったのは、むしろ当然の成り行きといえるだろう。

ベトナムのンガイ人が自身を客家として自覚し始めた時期は個人差がある。ただし、その重要な契機のひとつとして、1954年の「南遷」を無視することはできない。繰り返し述べると、ベトナム南部には「五幫」に属す別系統の客家がおり、ホーチミン市のチョロン地区の義安会館内にベトナム崇正会を構えている。ンガイ人は、ベトナム南部へ移住し、似た言語を話す「五幫」の客家に出会ったことで、自らもまた客家の一系統であると自覚するようになった。ただし、「五幫」の客家にとって、ンガイ人の客家語は訛が強く、生活習俗のうえでもヌン族やキン族などの影響を少なからず受けているようにみえた〔河合・呉 2014a: 98-99〕。したがって、前者は後者を客家の系統であると認めながらも、「ハイフォン客」「ハイニン客」「モンカイ客」「ヌン」などと称し、自らと差異化してきた。¹⁷⁾ さらに、「五幫」の客家は、正統な客家であると自負し、ベトナム崇正会を中心に客家語教育や客家聖地の建設を進めるなど、さまざまな活動を展開するようになった〔Kawai and Wu 2017〕。それに対して、もともと客家としての自己意識に欠けていたンガイ人は、ベトナム崇正会の活動に積極的に参与することもなければ、欽廉同郷会を中心に客家にまつわる活動を展開することもない。逆に、彼らは正統な客家とは距離を置き、広西出身の漢族としての集団カテゴリーを意識化していった。そして、護国観音廟を「ンガイ人らしさ」の象徴とし、それを祀っている。

ンガイ人が、客家をはじめとする他の漢族集団との関係のなかで、「ンガイ人らしさ」を強調する状況は、実際のところ中国でみられる。とりわけ出身の異なる複数の漢族集団が集まる華僑農場では、一方でベトナム帰国華僑や客家といった身分を表面化しつつ、他方でンガイ人としての特徴を示してきた。次はベトナムから離れ、中国の華僑農場の事例から、このことを検証してみたい。

3.2 ンガイ人の中国への帰国とエスニック・バウンダリーの再生産

上述のとおり、1970年代末の中越関係悪化に伴い、ンガイ人はベトナムを離れ、国外へと移住した。その主要な移住先のひとつが彼らの「故郷」、すなわち中国であった。ただし、1970年代末に彼らが主に移住したのは、祖先が属していた宗族ではなく、華僑農場であった。筆者は、ンガイ人のルーツである防城港、北海、玉林の諸村落を訪問し、1970年代以降の帰国状況を把握しようと試みたが、そこにはベトナムから戻ったンガイ人は皆無であった。その代わりに筆者は、中国南部各地の華僑農場にベトナムから帰国したンガイ人が多数住んでいることを聞き及び、実際に足を運んで、この情報を確認することができた。

華僑農場とは、1949年の共産党政権樹立以降、海外から帰国した華僑華人を受け入れるた

17) ンガイ人は、ハイフォンにはほとんど居住していなかったというが、ハイフォンの港を経由してベトナム南部に移住したため、このように呼ばれるようになった。「五幫」系統の客家は、ンガイ人の「客家語」は非常に訛が強く、ヌン族などと一緒に暮らし農耕を営んできたため、商売を主としてきた自らは習慣も異なると述べている〔河合・呉 2014a: 99〕。

め、中国政府によってつくられた農場である。とりわけ 1960 年にインドネシアから帰国した華僑華人が増加すると、広西、広東省、福建省、雲南省に 30 の国営華僑農場が建設された [奈倉 2012: 65]。さらに、海南省、江西省だけでなく、北方の吉林省や新疆ウイグル自治区にも華僑農場が建設された。¹⁸⁾ そうしたなか、1970 年代末には、ベトナムからの帰国華僑が大量に押し寄せることとなった。

今までの調査に基づく、華僑農場におけるンガイ人が占める人口比率には、確かに偏差がある。たとえば、筆者が数度にわたり短期調査をおこなった広東省東部の蕉嶺華僑農場では、インドネシアやマレーシアからの帰国華僑が大半を占めており、ンガイ人はほとんどいない。また、雲南省の玉溪にある甘庄華僑農場では、ンガイ人は少数派である。その反面、広東省にある広州の花都華僑農場や深圳の光明華僑農場では、ベトナムからの帰国華僑が多数おり、そのうち最も多いのがンガイ人である。¹⁹⁾

本稿では、そのうち、ンガイ人が占める割合が高く、「五幫」系客家の出身地のひとつでもある花都華僑農場の事例をみていくことにしたい。広州の北部に位置する花都華僑農場には約 1,500 名のベトナム帰国華僑がおり、正確な統計はないが、その 3 分の 2 がンガイ人であると見積もられている。ここは僑北苑、僑南苑、僑興苑、港頭の 4 つの区域に分かれており、特に僑北苑に集中している。僑北苑では、ほぼ全てがンガイ人で占められている建物もある。逆に、僑南苑にはンガイ人が少ない。その人口比率は居住区によって偏差がある。調査によると、ベトナム帰国華僑のうち大半がンガイ人であるが、他にも少数の雲南系、広東系、サンジウ族などがある。²⁰⁾

花都華僑農場の複数のインフォーマントが口を揃えて言うところによれば、ベトナム帰国華僑のなかでンガイ人が多いのは当然である。なぜならば、ベトナム南部の「五幫」系客家は、移住の歴史が浅く、商業を営んできたため、自ら選択して中国の諸都市やオーストラリア、北米に移住することができた。だが、ンガイ人はすでに中国の親戚とはつきあいがなく、農業・漁業を営む専門的なスキルがないため、中国政府の手配に委ねて華僑農場に行くしかなかった

18) 参考までに、中国でよく知られるインターネット辞典「百度百科」の「華僑農場」の項目では、合計 84カ所 (広東 23カ所、広西 22カ所、福建 17カ所、雲南 13カ所、海南 5カ所、江西 2カ所、吉林 1カ所、新疆 1カ所) の華僑農場の名称が掲載されている。〈<http://baike.baidu.com>〉(2017 年 7 月 11 日アクセス)

19) その他、まだ直接訪れて確認していないが、広西や広東省における帰国華僑への聞き取り調査に基づく、防城港の十万山華僑農場、欽州の麗光華僑農場、海南省の興隆華僑農場にも多くのンガイ人が住むという。福建省の華僑農場を含め、ンガイ人の分布やエスニシティを調査し理解を深めていくことは、今後の課題である。

20) 本稿は、サンジウ族について論じることを主な目的としていないが、これまでの調査に基づく、サンジウ族が漢語系の民族であるとする定説にはいささか疑問が残る。たとえば、花都華僑農場で出会ったサンジウ族は、広東省博羅県をルーツとしており、その言語や出自はヤオ族に近い少数民族であると認識していた。中国広東省での留学経験をもつベトナム社会科学院のチャン・アイン・ダオ氏も、サンジウ族地域を調査した後、この民族はヤオ族であると語っていた。ただし、冒頭で述べたように、ヌン族と同様、サンジウ族の内部に複数の異なるエスニック集団が内包されており、そのなかにはンガイ人と思われる人々もいるようである [河合・呉 2014a: 101]。

のだという。一部のンガイ人は、いったん華僑農場で落ち着き、その後、都市部に出たり、香港経由で北米に移住したりした。

花都華僑農場での調査を通して明らかになったのは、ここでもベトナムから移住したンガイ人の大多数は、ンガイ人としてのアイデンティティをもち、その言語・文化的特徴を強調していたことである。家族Aは、その一例である。家族Aは、父親（A1氏）が防城港出身のンガイ人、母親（A2氏）がキン族であり、クアンニン省で結婚して一女（A3氏）をもうけた。だが、1960年にベトナム戦争が勃発すると、一家で海南島の興隆華僑農場に移住し、そこで息子（A4氏）が生まれた。彼らはその後、オジ（A5氏）なども含め、親族で花都華僑農場に再移住した。花都華僑農場では、筆者がインタビューした30名を超えるンガイ人のうち、9割以上が、1978～79年の華人排斥運動時に移住してきていた。そのため、ベトナム戦争時に国を離れた点で、家族Aの移住史は稀有なケースに属すといえるだろう。ただし、父親がンガイ人でありさえすれば、母親が漢族でもキン族でも、一般的にはンガイ人とみなされうる。この点においては、ベトナム戦争時に移住しても華人排斥運動時に移住しても、変わらないようである。

ただし、ここで注意すべきは、旧欽廉地区出身にルーツをもつ客家系漢族の全てが、ンガイ人と自己認識しているわけではないということである。花都華僑農場では、すでに他の漢族集団としてのアイデンティティを獲得している事例も一部みられた。たとえば、家族Bは、父親（B1氏）が防城港出身のンガイ人、母親（B2氏）が雲南系の漢族で、ハノイで長兄（B3氏）、次兄（B4氏）、長女（B5氏）、末弟（B6氏）が生まれた。家族Bは華人排斥運動の影響により、1978年に、一家で花都華僑農場に移住した。ただし、キン族の女性と結婚していたB3氏だけは、ハノイに残って暮らしている。その後、B1氏とB2氏は他界し、B4氏夫婦は香港経由でカナダに移住した。家族Bは、B1氏がンガイ語を話すンガイ人であったと、華僑農場の高齢者が述べていたため、父系原理から考えるとンガイ人の家族であったといえる。だが、B1氏は家庭でンガイ人であることを強調しておらず、家庭では中国語やベトナム語を使ってきたこともあり、その子どもたちにはンガイ人としての自己意識がない。

家族Bは、ベトナム語を話し、ベトナム料理も好んで食べるが、漢族としての意識を強くもっている。たとえば、B5氏は、家族Bがベトナム出身の漢族であり、中国ではベトナム帰国華僑であると主張する反面、ンガイ人ではないと話す。興味深いことに、家族Bは家族Aを「ベトナム人」と呼称している。一般的に漢族社会では父親の血統が重視されるので、家族Aはンガイ人＝漢族の家庭とみなされるはずである。もちろん、家族Bはンガイ人もベトナムの漢族の一種であることを知っているが、ンガイ人は普通の漢族より「土着化」されており、漢族の亜流であるとみなされているふしがある。だから、家族Bはベトナム化された漢族＝ンガイ人であることを否定し、自身が正統な漢族であることを強調するのである。



写真 4 花都華僑農場におけるンガイ人の「打齋」
食堂での儀礼（左）と自宅での「合相」（右）（2015 年 10 月，筆者撮影）

このように、各家庭の状況によりンガイ人といっても一様ではないが、中国に移住してもンガイ人としての集団意識を保持する家族が大半を占めることは注目に値する。現時点の帰国華僑をめぐる諸研究は、ベトナム帰国華僑、インドネシア帰国華僑など、国家という政治空間を基準に分類する傾向が強い。²¹⁾ だが、花都華僑農場でフィールドワークをしていると、同じベトナム帰国華僑といってもエスニック意識に多様性があることは明らかである。特にンガイ人は、前述のように、異なる特徴をもつ集団として認識されている。ンガイ人自身もまた、他の帰国華僑とは異なる自集団の文化的特色を強調することがある。そのうち最も顕著であるのは「打齋」である。

奈倉 [2012: 214] によると、「打齋」とは、ベトナム帰国華僑に固有の文化として認識される祖先崇拜儀礼である。ただし、少なくとも花都華僑農場や光明華僑農場では、ベトナム帰国華僑のなかでも特にンガイ人が重視する儀礼であるとみなされている。花都華僑農場のンガイ人の間では、死後 7 日、21 日、28 日、49 日、100 日に儀礼をおこない、1 年後にも「打齋」をする。たとえば、家族 C（ンガイ人）は、2015 年 10 月に死後 1 年の「打齋」を僑興苑で催したが、ンガイ人の親戚や近隣住民が多数参加し、なかには光明華僑農場から駆けつけた親族もいた。儀礼の具体的な過程は次のとおりであった。まず、15 時半から道士がアパートの下で高い木を立て、銅鑼を鳴らす。16 時 50 分より華僑農場の食堂で共食した後、そこで親族や参加者が道士の導きのもと祖先を参拝する。そして、深夜 0 時を過ぎるとアパートの下に戻って銅鑼を鳴らし、念仏を唱え、1 時半まで続ける。吉の時間をみて 2 時 10 分になると死者の

21) たとえば、奈倉の帰国華僑をめぐる研究 [奈倉 2007, 2012] でもインドネシア帰国華僑とベトナム帰国華僑という国を単位とした区分がなされており、ベトナム帰国華僑の内部における多様性にあまり着目していない。帰国華僑研究者である陳碧によると、中国の帰国華僑研究も似たような傾向にあり、ベトナム帰国華僑のなかに客家や広府人がいることくらいは知っているが、ンガイ人に着目している研究者はいない。その要因として、帰国華僑研究と客家研究、およびベトナム漢族研究の間の対話が十分になされてこなかったことが考えられる。中国の華僑農場におけるンガイ人の動向は、一から調査し直さねばならない状況になっている。

家に行き、「合相」（楽器を鳴らしながら香を少しずつ祭壇に近づけていく儀礼）をおこなう。3時過ぎに終了し、参加者は、祖先となった死者の運気が込められた、赤い糸をもって解散する。

こうした儀礼をめぐる、家族Cだけでなく、家族Aや家族Bも「これはンガイ人の特色だ」と語る。この言葉の裏には、「ンガイ人は祖先を特別大切にする」という肯定的なニュアンスも含まれるし、「夜遅くまで大きな音をたてるから迷惑だ」と言い切る非ンガイ人もいる。花都華僑農場では、ンガイ人による盛大な「打齋」の儀礼は、しばしば他の帰国華僑と騒音をめぐるトラブルをおこしてきた。かつて「打齋」は三日三晩おこなわれ、移住の初期の頃には、大きな音に驚いた他の帰国華僑が儀礼とは知らず警察を呼び騒ぎになったこともあった。その後、日数を短縮し儀礼を簡素化したが、やはり夜遅くまで大きな音をたてて活動をおこなうため、ンガイ人と他の帰国華僑の間に溝が生まれるようになったのだという。こうした経緯もあり、「打齋」は、ンガイ人のエスニック・マーカーとして認識されるようになった。

その他、花都華僑農場では、ンガイ人のエスニック・マーカーとして、家に祖先の位牌を置くことがしばしば挙げられる。実際に、ンガイ人としての自己意識が薄い家族Bを除くと、筆者が観察したンガイ人のどの家にも位牌が置かれていた。その反面、同じベトナム帰国華僑であっても、ンガイ人でない家庭には必ずしも位牌が置かれていない。家族Aや家族Cによると、ンガイ人にとって祖先への崇拝や「打齋」は簡単には放棄することができないものであり、祖先を大事にするのがンガイ人の特徴なのだという。

このようにンガイ人は、中国に移住しても、ンガイ人としてのアイデンティティを保っている。彼らが、ンガイ人としてのエスニック・カテゴリーを維持・再生産するひとつの要因は、以上にみる他の帰国華僑との関係性であるが、もうひとつの要因として現地の広東客家との関係性が考えられる。

花都華僑農場のンガイ人から話を聞くと、彼らは、ベトナム東北部に住んでいた1970年代まで、客家という概念を知らなかった。花都に移住してから、周囲に似たような言葉を話す客家という人々をみて、自身が客家であることに気づいたのだという〔河合・呉 2014b: 43〕。だが、ベトナム南部に移住したンガイ人がそうであったように、彼らは、ンガイ語が広東省の「正統な」客家語と発音やアクセントのうえで異なることから、自身を正統な客家ではなく、客家に準じる存在であると自覚するようになった。つまり、彼らは一方で自身を客家として位置づけながらも、他方でンガイ人という集団的なまとまりへの意識を強めるようになった。

こうしたンガイ人の意識は、食文化にも表れている。ンガイ人である家族Dは、華人排斥の煽りを受けて1979年にモンカイから花都華僑農場に移住し、その後、華僑向けのレストランを開いた。そのなかで、家族Dは、客家の特色とされる梅菜扣肉（炒めた紫蘇と厚切りした豚バラを蒸した料理）や釀豆腐（豆腐に豚肉を詰めて煮た料理）を提供するようになった。

た（写真 5）。家族 D を含む花都華僑農場のンガイ人によると、彼らがかつてベトナムに居住していた頃は貧しかったので、春節時くらいにしか梅菜扣肉を食べたことはなかったし、釀豆腐に至っては見たこともなかった。ところが、ンガイ人が客家の一系統であり、客家の代表的な料理が梅菜扣肉や釀豆腐であることを知ると、家族 D はそれをレストランのメニューに加えるようになった。ただし、このレストランで提供される梅菜扣肉や釀豆腐は、「正統」とされる地元の広東客家料理とは微妙に異なっている。このレストランの梅菜扣肉や釀豆腐について、中国で生まれ育った A4 氏ですら、「正統な客家料理と似て非なるこの味付けこそがンガイ人の特色だ」と述べる。ンガイ人の消費者は、食を通して、正統な客家とは異なるンガイ人の文化的特色を見出している。

このようにンガイ人は、中国に移住しても、自身がンガイ人であるというアイデンティティを失っていない。むしろ、中国でさまざまな出自をもつ帰国華僑と接し、言語的に近い地元の客家との微細な差異を見出すことで、儀礼、位牌、言語、食などの点でンガイ人としてのエスニック・マーカーを見出している。その結果、ンガイ人としてのカテゴリーを維持し、新たな特色をとりこんで再生産しているのである。同時に、彼らは、自身がンガイ人であると認識したうえで、ベトナム帰国華僑でもあり、客家でもあると主張することがある。もちろん家族 B のようにベトナム帰国華僑としての立場を主張する人々もすでにいるし、後述するように、ンガイ人の若者のなかには正統な客家として立ち振る舞う人々もいる。ただし、花都華僑農場とその近郊での調査に基づくと、ンガイ人は話す相手の文脈に応じて、帰国華僑や客家という表現を使っているにすぎない。一般的に中国ではンガイ人という存在は知られていない。だから、華僑農場の外部の人々には帰国華僑として説明するし、民族所属を述べる時は漢族や客家として説明する。特に、レストランのようにより広い客層を獲得したい時には、帰国華僑や客家という一般的に知られる概念を利用しなければならない。つまり、中国に戻ったンガイ人も、状況に応じて帰国華僑や客家としてのアイデンティティを使い分けている。



写真 5 ンガイ人の特色とされる梅菜扣肉（左）と釀豆腐（右）（2014 年 1 月，筆者撮影）

だが、ンガイ人は、帰国華僑や客家でもあるとはいっても、ガイ族という民族カテゴリーについては何も知らない。クアンニン省で生まれたンガイ人であり、ベトナム帰僑僑友会の会長も務めているE氏（男性、1950年代生まれ）は、民族所属に関するインタビューのなかで次のように述べていた。

〔河合〕あなたがクアンニン省にいた時の戸籍上の民族名は何でしたか。

〔E氏〕中国から来たンガイ人は、みなベトナムの少数民族である漢族です。

〔河合〕あなた方はガイ族ではないのですか。

〔E氏〕ガイ族？

〔河合〕ベトナムの54の民族には漢族という民族名はありません。漢族に相当するのはホア族とガイ族です。

〔E氏〕それは今の民族分類ですか。私たちがいた頃は確かに漢族で、当時の私たちの戸籍にも「漢族」と明記されていました。おそらくガイ族とは、後につくられた民族でしょう。私たちは1970年代末にベトナムを離れたので、ガイ族という民族は知りません。（2014年1月2日、花都華僑農場でのインタビュー）

自身がンガイ人であることを強調するにもかかわらずガイ族という民族名称について聞いたことがないという回答は、E氏だけでなく、筆者が話を聞いたンガイ人も全てに共通していた。確かにガイ族は1979年に認定された民族であるので、それを知らないことは不自然ではない。だが、後述するように、E氏をはじめとする花都華僑農場の人々は、定期的にベトナムに戻ったり、北米に移住したンガイ人ともつながりがあったりすることを付言しておかねばならない。

3.3 ンガイ人による国際ネットワークの形成

すでに述べたように、ンガイ人は、広西の南部からベトナムに移住したが、一般的な傾向として故郷の親族集団とは関係が切れている。だから彼らは中国政府の手配に従い各地の華僑農場に移住したのであるが、移住によって国を超えたつながりが新たに生み出されている。

花都華僑農場の家族は、改革開放政策により中国が豊かになるにつれ、工場で働くようになり、さらに都市部に出て商売を営むことも珍しくなくなった。彼らは、ベトナムとのつながりを生かして交易・通訳などの職に就き、中国―ベトナム―北米などと国境を越えて往来している。その時、ンガイ人としてのアイデンティティが強い人々の場合、友人や知人をたどり、ンガイ人同士の商業ネットワークを構築することもある。また、ンガイ人は、中国に再移住した後、ベトナムの親戚との関係を全く断ち切ったわけではない。1970年代末の華人排斥運動以降、ベトナムにとどまるンガイ人もいた。その多くは南部に居住しているが、B3氏のように、ベトナム北部にもンガイ人をルーツとする親戚がいるようである。家族Bの場合、B6氏

はベトナム－中国間の貿易に従事しているため、頻繁に B3 氏に会っている。カナダに移住した B5 氏の一家は、定期的に花都に戻っている。

ベトナムに祖先の墓が残されていることも、彼らがベトナムへ戻る動機のひとつとなっている。花都華僑農場では、毎年清明節になると、各々の家族が代表を派遣してベトナムの墓を参拝し、そこで親戚を訪問する行事をおこなっている。家族 A は、毎年清明節に 1～2 名の代表を派遣して、クアンニン省にある祖先の墓を参拝するだけでなく、親戚めぐりもする。また、E 氏の場合、クアンニン省にはもう親戚がいなしながらも、母親の墓がそこにあるため、本人が毎年墓参りに行くようにしている。

ただし、花都華僑農場での調査からは、ベトナムの墓や親戚を訪問する人々はほぼ全員が中高齢者であることがわかる。中高齢者層は、自身がベトナムで生まれ育っているからベトナム語を話すことができるし、ベトナムにいる親族とも面識がある。家族 A でも毎年ベトナムを訪れる代表者は中高齢者層であり、A3 氏や A4 氏のような 30 歳代の成員が自主的に行くことはまずない。A3 氏や A4 氏によると、彼らはベトナム語ができず、ベトナムの親戚と意思疎通を図ることができないため、戻っても仕方がないのだという。ベトナムの親戚はンガイ語を話せるはずだから言語面では問題ないのではないかと筆者が質問しても、ベトナムに住む親戚とは心的な距離があると答えるばかりである。その反面、彼らは自身をベトナムから帰国したンガイ人であると自覚しつつも、客家としての身分に自己を同定している [河合 2016]。特に A3 氏は、夫がマレーシアの帰国華僑であり、姑が花都出身の客家である。したがって、A3 氏は、姑に「正統な客家の文化」を教わり、広東省の客家文化を生活にとりこむようになった。一例を挙げると、ンガイ人は自宅に祭壇を設けて祖先の位牌を置く習慣があるが、A3 氏は姑の意見に従い、さらに祖先の位牌の横に観音を、位牌の下方に「五方五土龍神」の神位と土地神を置いた。広東省の客家は集合住宅や家庭で、そうすることが多いからである [河合 2008]。

このように親族の位相では、世代が下るにつれ、中国在住のンガイ人とベトナムの親戚のつながりが薄れていっている。ただし、だからといって中越間のンガイ人のネットワークやアイデンティティが今後なくなっていくと予見するのは早計であろう。とりわけ団体のレベルにおいて、世界各地に移住したンガイ人が国際的なネットワークを形成する現象がみてとれるからである。こうしたグローバル・ネットワークの拠点のひとつとなっているのが、欽廉同郷会（団体によっては欽廉霊防同郷会などと多様に呼称する）である。前述のとおり、欽廉同郷会はベトナム南部にもあり、旧欽廉地区をルーツとする人々により結成される華人団体である。この団体には、旧欽廉地区をルーツとする異なる漢族集団が属しているが、そのうちンガイ人の影響力が大きいことはすでに述べたとおりである。

欽廉同郷会は、ベトナムから華僑華人が流出することで、世界各地で結成されることになった。なかでも最も早い欽廉同郷会は、1975 年に台湾で結成されている。台湾では今でも台北



写真6 シドニーのキャンリー・ベールにある護国観音廟（2017年6月，筆者撮影）

市欽廉同郷会がある。

1970年代末に華人排斥運動がおこると、ンガイ人は、中国だけでなく、香港を経由するなどして、オーストラリア、北米、ヨーロッパなどに移住した。それに伴い、1992年9月13日、オーストラリアのシドニーで漢州欽廉同郷会が成立した。そして、1995年にキャンリー・ベール（Canley Vale）で会所を定め、翌年2月になると護国観音廟の建設に着手した。²²⁾ さらに、オーストラリアでは、メルボルンでも維省欽廉同郷会が結成された。他方で、アメリカ合衆国では、カリフォルニア州で2001年に美国欽廉霊防同郷会が成立しており、他にも三藩市欽廉同郷会（サンフランシスコ）、美国屋倉広西欽廉同郷会（オークランド）、美国洛杉矶欽廉霊防同郷会（ロサンゼルス）がある。

これらの欽廉同郷会は、国際ネットワークを新たに結び始め、2006年になると世界欽廉懇親大会を開催するようになった（表1）。

初めてオーストラリアで世界欽廉懇親大会を開催した動機は、2006年10月1日にシドニーの護国観音廟で感恩亭²³⁾を建設した式典をおこなうことにあった。この時、世界各地から関係者が集まり、広西からも華僑弁事所の副主任が出席した。そして、2011年3月17～18日には美国欽廉霊防同郷会の主催によりロサンゼルスで第2回大会が開催され、ベトナム、中国、台湾、香港、オーストラリア、アメリカ、カナダ、マレーシアなどから130名余りの欽廉同郷会関係者が集まった。中国からは広西の華僑弁事所だけでなく防城港市や欽州市からも代表団が派遣され、広西の社会経済的状況だけでなく、広西の華僑弁事所が企画する「中国一アセ

22) キャンリー・ベールにある護国観音廟の碑文に基づく。キャンリー・ベールは、シドニー西郊外に位置するアジア人街・キャブラマッタ（Cabramatta）の近くにある。キャンリー・ベール駅の近くには、護国観音廟だけでなく、越綿寮華人聯誼会の拠点でもある天后廟も建設されている。シドニーの護国観音廟については、芹澤の研究〔2013, 2015〕でも言及されている。

23) 護国観音廟の境内には、護国観音を祀る主殿のほか、閔聖帝君、財帛星君、天后娘娘を祀る建物があり、主殿の後方には祖先の位牌を安置する「感恩亭」がある。

表1 世界欽廉懇親大会の概要

回	年月	地点	備考
1	2006年9月	シドニー	広西の華僑弁事所から派遣.
2	2011年3月	ロサンゼルス	世界各地から130名余りが参加.
3	2013年11月	香港	香港欽廉同郷聯誼總會により開催.
4	2015年10月	ロンカン	12の国／地域から800名余りが参加.
5	2017年10月	防城港	30余りの国から700名余りが参加.

出所：広西壮族自治区帰国華僑聯合会公式ホームページと中国新聞網を参考に筆者作成。

アン自由貿易区における華僑商人・広西の旅」「華僑青少年の中国ルーツ探しの旅」などについて宣伝をおこなった。

さらに、世界の欽廉同郷会の支持のもと、2009年5月7日に香港で欽廉同郷聯誼總會が設立され、2013年11月に香港で第3回大会が開催された。続いて、2015年10月30日から11月1日にかけてベトナム南部ドンナイ省のロンカンで第4回大会が開催され、12の国／地域から800名余りの関係者が参加した。広西からは党副書記が参加しただけでなく、華僑弁事所、防城港、欽州、柳州、梧州の代表団が参加し、さらに前述の台北市欽廉同郷会、台湾広西同郷会、澳洲欽廉同郷会、維省欽廉同郷会、美国欽廉霊防同郷会、三藩市欽廉同郷会、美国屋倉広西欽廉同郷会、美国洛杉矶欽廉霊防同郷会、および、美国西雅図海寧同郷会（シアトル）、新加坡広西暨高州会館（シンガポール）、馬來西亞柔佛州広西總會（マレーシア・ジョホールバル州）、瓦尔阿図広西同郷会（バヌアツ）、世界越東寮華人団体聯合会など、30の関連団体がロンカンの護国観音廟に参集した。また第5回大会はンガイ人の主要なルーツである防城港で2017年10月23日に開催され、中国だけでなく、オーストラリア、アメリカ、ベトナムなど30余りの国から700名余りの関係者が出席した。

世界欽廉懇親大会は、上記にみるように、広西の地方政府が華僑政策の一環として積極的に顔を出すなど、政治的な色彩を強めている。とはいえ、各国／地域の欽廉同郷会は民間団体であり、同郷の人々とのつながりを強めることを第一の目的としている。当初は小規模でおこなわれた世界大会も、第4回、5回大会になると7～800名の参加者を集め、今後はさらに多くの人数が参加する可能性がある。²⁴⁾

ここで改めて確認しておく必要があるのは、欽廉同郷会は、その名のとおおり同郷団体であり、広府人を含むさまざまな漢族集団から成り立っていることである。だが、欽廉同郷会にお

24) 本稿における団体とその活動については、ベトナム、中国、サンフランシスコ、ニューヨークにおける現地調査から聞いた情報、および、広西壮族自治区帰国華僑聯合会公式ホームページ（〈<http://www.gxql.cn/>〉；2017年4月19日アクセス）、中国新聞網の「广西侨务代表团出席世界第二届钦廉乡亲大会」（〈<http://www.chinanews.com/zgqj/2011/04-06/2952746.shtml>〉；2017年4月20日アクセス）によるものである。

いてンガイ人は主要な集団のひとつであり、シドニーの護国観音廟がンガイ人の手によって建立されたことに象徴されるように、この団体の設立やグローバル化の過程においてンガイ人は主要な役割を果たしてきた。目下、管見の限りにおいて、ンガイ人だけにより組織される一定規模の華人団体は存在しない。だからこそ、欽廉同郷会は、越綿寮華人団体聯合会（ベトナム、カンボジア、ラオスから移住した華人が世界中で結成している団体）と同様に、世界中に離散したンガイ人が集まる数少ない社会の場となっている。欽廉同郷会では確かに広東語や中国語が飛び交うが、それによりンガイ人は、自己が他の漢族集団とは異なるエスニック集団に属することを意識しうる。実際、欽廉同郷会は、旧欽廉地区出身の漢族が集まる場である一方で、ンガイ人同士がンガイ語で絆を深める場ともなっている。そして、世界欽廉懇親大会のようなグローバルな場で各国のンガイ人が出会うことで、ンガイ人としてのアイデンティティが相互に確認されている。ンガイ人は、戦争や華人排斥運動などで離散したが、それにより却って越境的なエスニック・カテゴリーの形成が促されていったのである。

4. 総括と展望

本稿は、特に移住やアイデンティティ・ポリティクスに着目することで、ベトナムで公認された民族カテゴリーの枠にはおさまらない、越境集団としてのンガイ人を論じた。それにより明らかになったンガイ人の全体像は次のとおりである。すなわち、第一に、ンガイ人は中国の旧欽廉地区にルーツをもつ「客家」の一系統であり、1954年までは中国とベトナムの国境地帯に居住する越境集団であった。第二に、1979年にガイ族という民族カテゴリーが政府により認定されたが、ンガイ人の全てがガイ族になったわけではなく、ホア族やヌン族を名乗る人々もいた。それによりンガイ人は、戸籍上、複数の民族に分かれることになった。他方で、第三に、ンガイ人は1954年の「南遷」により広東省東部出身の「正統な」客家に出会うことで、ンガイ人としての自己意識を強めた。21世紀に入っても、彼らは、「正統な」客家が組織する崇正会に対して、ンガイ人を中心とする欽廉同郷会を組織する動きをみせている。第四に、ンガイ人は、1970年代末の華人排斥運動により中国に移住した後も、移住先の客家や帰国華僑との関係のうえで、むしろンガイ人としての自己を維持するようになった。さらに、第五に、華人排斥運動によってグローバル・ネットワークが形成されることで、むしろンガイ人というエスニック・カテゴリーが相互に確認される結果を生み出すことになった。

もちろん早期に移住したンガイ人のなかには、他のエスニック集団と同化している人々もいるが、ンガイ人のベトナムへの移住は1940年代まで絶え間なく続いている。ンガイ人を自称する人々が、グローバルなつながりのもと一定のまとまりをもって存在していることが、本稿の事例より確認できる。ンガイ人の大半は海外に移住したが、いまだにベトナムには少なからずンガイ人が存在しており、その一部がガイ族に認定されている。しかし、そもそもガイ族と

は華人排斥運動後に導入された新たな民族カテゴリーであり、その存在を知らないンガイ人すらいる。むしろ、ンガイ人は、自身が旧欽廉地区にルーツをもつ漢族であることを前提としつつ、状況に応じて客家、ガイ族、ホア族、ヌン族などの身分を名乗る、アイデンティティ・ポリティクスを繰り広げてきた。逆にいえば、ベトナムのンガイ人は、ガイ族、ホア族、サンジウ族、ヌンの漢族などという既定の民族枠組みからでは、捉えきることができない。ンガイ人は、各々の状況に応じて表面的に民族所属をかえつつも、旧欽廉地区をベースとするひとつの越境集団としてベトナムで存在してきたのである。

これまでベトナム漢族研究においてンガイ人の存在にスポットが当てられてこなかった理由のひとつは、ベトナム民族研究と中国民族研究の断絶にあると考えられる。ベトナム民族研究は、政府に公認された民族の枠組みを出発点としてきたために、ンガイ人をガイ族の前集団としてしか捉えておらず、ヌンの華人など他の民族のサブ集団との関係性について曖昧に捉えてきた。他方で、中国民族研究は、基本的に中国国内の諸民族に関心を寄せてきたため、たとえば客家の一系統であるンガイ人がベトナムの複数の民族にどのように分岐したかを考察する視点を失ってきた。さらに、同じ中国民族研究であっても、帰国華僑研究と漢族研究の間に断絶がみられる。帰国華僑研究は「ベトナム帰国華僑」という国別のカテゴリーに依拠してきたため、ンガイ人というエスニック集団および彼らが構築するグローバル・ネットワークを等閑視してきたのである。

しかし、ベトナムにおいてンガイ人にインタビューするなかで気づかされたのは、彼らは自身が戸籍上どの民族に属しているかよりも、中国から移住してきた漢族であることを重視していることである。換言すれば、彼らは、ベトナムという政治空間のなかだけに生きているわけではなく、中国との関係から自己を位置づけている。こうした側面は、ベトナムの 54 の民族枠組みからだけでは理解することが難しい。グローバルな漢族研究の視点からベトナムを調査することで、ンガイ人のような「隠された」漢族カテゴリーがみえてくることもある。ベトナムという政治空間を超えたベトナム漢族の研究が、今求められている。

謝 辞

本稿は、2017 年 2 月 25 日に京都大学で開催された東南アジア学会関西例会の議論に基づき、これまでベトナムや中国南部でおこなってきた調査成果を論文としてまとめたものである。本稿の着想にあたり、伊藤正子、Nguyễn Văn Chính、芹澤知広、伊藤まり子の各氏の研究発表には大いに啓発された。また、ベトナムおよび中国での調査にあたっては、呉雲霞氏、陳碧氏および現地のインフォーマントの方々には大変お世話になった。この場を借りて御礼申し上げたい。なお、本稿の基盤となる現地調査は、文部省科学研究費「漢族の特色の空間利用とエスニシティの再編—中・越隣接エリアの調査研究」（若手研究 B、河合洋尚代表）および「インターフェイスとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間」（基盤研究 B、宮原暁代表）により実施した。

引用文献

日文・中文

- 范 宏貴. 1999. 『越南民族与民族問題』南寧：広西民族出版社.
- . 2004. 「自称客家の越南艾族」『中国民族報(電子版)』7月9日, 第4面.
- 古田元夫. 1991. 『ベトナム人共産主義者の民族政策史—革命の中のエスニシティ』大月書店.
- . 1995. 『ベトナムの世界史—中華世界から東南アジア世界へ』東京大学出版会.
- 五島文雄. 2011. 「インドシナ三国の華人・華僑社会の変容」『大阪大学中国文化フォーラム・ディスカッションペーパー』No. 2011-6.
- 華僑志編纂委員会編. 1958. 『華僑志—越南』出版地不明.
- 伊藤正子. 2008. 『民族という政治—ベトナム民族分類の歴史と現在』三元社.
- . 2009. 「華僑華人—北部」末成道男編『ベトナム文化人類学文献解題—日本からの視点』東京外国語大学アジア・アフリカ文化研究所, 132-133.
- 河合洋尚. 2008. 「梅州地区的風水与環境観—以囲龍屋, 現代住宅, 墳墓為例」『客家研究輯刊』32: 171-181.
- . 2012. 「広西省玉林市における客家意識と客家文化」『客家與多元文化』7: 28-47.
- . 2016. 「ベトナム北部華人の移住と社会的ネットワーク—6つの広東系／客家系家族をめぐって」大阪大学 GLOBAL CLLABORATION Online Journal (文部省科学研究費補助金「インターフェイスとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間」[基盤研究 B] 成果報告).
- 河合洋尚・呉 雲霞. 2014a. 「ベトナムの客家に関する覚書—移動・社会組織・文化創造」『華僑華人研究』11: 93-103.
- . 2014b. 「ベトナム客家の移住とアイデンティティ—ンガイ人に関する覚書」『客家與多元文化』9: 26-51.
- 金 裕美. 2012. 「少数民族自治県の漢族—広西チワン族自治区三江トン族自治県を例に」瀬川昌久・飯島典子編『客家の創生と再創生—歴史と空間からの総合的再検討』風響社, 189-192.
- 満鉄東亜経済調査局. 1939. 『佛領印度支那に於ける華僑』開明堂.
- 中西裕二. 2002. 「ベトナム南部におけるオン・ボン神と本頭公—ある華人起源の信仰」吉原和男・鈴木正崇編『拡大する中国世界と文化創造—アジア太平洋の底流』引文堂, 294-317.
- 奈倉京子. 2007. 「過渡的居場所としての『ベトナム帰国華僑』」『華僑華人研究』(日本華僑華人学会) 4: 17-41.
- . 2012. 『帰国華僑—華南移民の帰還体験と文化的適応』風響社.
- 芹澤知広. 2009. 「ベトナム・ホーチミン市のヌン族の華人」『フィールドプラス』2: 6.
- . 2013. 「ベトナムにおけるヌン族の華人の観音廟」片岡樹編『東南アジア大陸部における宗教の越境現象に関する研究』(文部省科学研究費補助金成果報告書, 基盤研究 A), 26-40.
- . 2015. 「移民と宗教」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』丸善出版, 152-153.
- 太平洋協会編. 1940. 『佛領印度支那 政治・経済』河出書房.
- 塚田誠之. 2017. 「三江県の『六甲人』に関する覚書—その歴史・文化と民族意識」塚田誠之・河合洋尚編『中国における歴史の資源化の現状と課題』(国立民族学博物館調査報告 142), 293-308.
- 鐘 文典. 2011. 『広西客家』広西師範大学出版社.

欧文・越文

- Dang, N. V., T. S. Chu and H. Luu. 2000. *Ethnic Minorities in Vietnam*. Ha Noi: The Gioi Publishers.
- Kawai, H. and Y. Wu. 2017. The Construction of a Sacred Landscape by the Hakka in Southern Vietnam.

- In M. Han, H. Kawai and H-W. Wong eds., *Family, Ethnicity and State in Chinese Culture under the Impact of Globalization*. Bridge 21, now printing.
- Tran Cuc Lai. 2013. *The Nung Ethnic and Autonomous Territory of Hai Ninh*. Translated by Ngo Thanh Tung. Taipei: May King Enterprise Co, Ltd.
- Vaillant, L. 1920. L'Etude anthropologique des Chinois Hak-ka de la province de Mongcay (Tonkin), *L' Anthropologie* 30: 83-109.
- Viet Bang, Diep Trung Binh, Thi Nhi. 1979. Nguoi Hoa, Nguoi Ngai o Viet Nam Va Am Muu Cua Chu Nghia Ba Quyen Trung Quoc, *Tap Chi Dan Toc Hoc* 2: 4-12.